

---

# 死者物語

海豹釣太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死者物語

### 【Nコード】

N0486M

### 【作者名】

海豹釣太

### 【あらすじ】

この世界を、未だ数匹の亀と象が支えていた時代。霧は濃く、森は暗く、神秘と信仰と迷信は絶えず、ただ空だけはどこまでも高かった頃。忘れられた、彼らの物語。

## 騎士物語

昔々、ある王国に、ひとりの騎士がいました。

騎士はとても貧乏でしたが、仲間たちにかこまれて、とても楽しく暮らしていました。

ある日のことです。騎士に、王女さまの護衛が命じられました。それは、とても名誉のあることです。騎士は、喜んで仕事に励みました。

王女さまはとてもわがままでした。お茶の準備、お菓子の準備、何をするにも騎士をこき使います。それでも騎士は、ただのひとつの不満さえ漏らしませんでした。

騎士は、仲間の騎士たちから噂話を聞きました。それは、この国の王様が、王女さまの暗殺を企てている、という不穏なものでした。仲間たちはよくある与太話と、笑いましたが、騎士にはその噂が気になってしかたないのです。

騎士はとても注意深く王様を調べました。そして、見てしまったのです。暗殺などを生業としている汚い連中と王様が話しているところを。あの噂話は本当のことだったのでした。

その夜。騎士は王女さまを連れて、城を飛び出しました。このまま城にいては、王女さまは殺されてしまいます。騎士には、そんな理不尽は許せないのです。

「これは捕まったら死刑じゃの。酷い酷い拷問を受けた上で磔じゃ。哀れじゃ、哀れじゃ」

「なにせお前は誘拐犯じゃ。王女誘拐の大逆賊じゃ。昨日までただの召使だった男が大した出世じゃのう」

何も知らない王女さまは、騎士を誘拐犯と罵ります。

それでも騎士は何も言いません。親に殺されようとしているなどと、誰が口にできましょうか。

騎士は、祖国を背に、ただ走ります。王女さまの罵声をうけながら。

手をつなぐ、頬を寄せる。

暗い暗い路地裏で、男はその子供を拾った。

そこは酷く狭く、酷く寒く、酷くじめじめした場所であり、  
いに言つて吹きだまり。さらに言うなら、ゴミ箱の中だろうか。男  
はそんな風に思った。

酒場から家への帰り路。泥酔した頭と目で。

乱雑に積み上げられたガラクタの中に、男はその子供を見つけた  
のだった。

翌日。硬く冷たい床の上で目を覚ました男は、自分のベッドの上  
で安らかな寝顔を見せる子供を見て、心底ながら頭を抱えた。

男は人買いだった。

その日から、男と子供の共同生活が始まった。

子供は異邦人の子であるらしく、言葉が全く通じなかった。彼女は  
何度も自らの名前とおぼしきものを発声してみせたが、結局男に  
は、その名前を発音することが出来なかった。仕方無く、男はその  
子供にリーゼと名付けた。

男は人買いだった。

男は馬車で貧しい村を回り、沢山の人間を購った。そしてそのほ  
とんどが、年端もいかぬ子供である。そして買い取った子供を、男

なら鉱山や炭鉱、女なら女衞に、淡々と売り払った。

馬車の中には、リーゼの姿があつた。男は色々と悩みはしたものの、結局、彼女をひとり家に残しておくわけにはいかないと判断したのであつた。

リーゼは終始楽しそうな様子だった。こうして色々な場所を巡ったことがなかったのか。あるいは、ずっと色々な場所を転々とする生活に慣れていたのか。男はリーゼを、恐らくは流民の子ではないかと考えていた。

男は子供を買い、子供を売り、子供を養った。

男は苦しんだ。

そうして三ヶ月の月日が経った頃、男の元にひとつの商談が舞い込んだ。

リーゼを見た女衞の一人が、彼女を買い取りたいと申し出たのだ。異邦人の子は珍しいから、高く売れる。恐らくはそういった打算があつたのだろう。

男は苦しんだ。

馬車の荷台に満載された子供。

男の膝の上で無邪気に微笑むリーゼ。

それから三日後の、取引が行われる日の朝。男は、長い事彼が住んでいた街から姿を消した。

それは、男が住んでいた街ではよくあること。石ころのようにありふれた出来事であつたので、誰ひとりとして気に留める事はなかった。リーゼを買い取りたいと申し出た女衞でさえも、三日後にはその事実を忘れていた。

ある日。

その街に、小さな楽団がやってきた。仮面を着けた道化が指揮をとり、大勢の子供たちが、様々な楽器を持って、様々な音色を奏でた。

彼等は皆、幸福そうだった。

## 明日のために

小さな街の片隅で、私は肉切り包丁を振るっていた。だけどそれも昨日まで。私が働いていた小さな肉屋は、火事でみんな焼けてしまった。

私に残ったのは、病弱な妹と、使い慣れた肉切り包丁だけ。

その日暮らしたった私達に、明日を生きて行く見込みなどどこにもない。私は肉を切る事しかできない。だが、肉を仕入れる金など皆無。この街の肉屋などどこも似たり寄ったりで、いきなり新たな者を雇い入れる余裕がある店などどこにもありはしなかった。

「ドンちゃん」

妹は私をそう呼ぶ。幼い頃のままごとで、私がいつも貴族の役を務めていたからだ。

「大丈夫だよアデリ。アデリは何も心配することはないんだ」

私は肉切り包丁を研ぐ。

今日は街の東に。

明日は西に。

飽きたら南に。

気の向くまま北に。



私は肉切り包丁を振るう。

私の作るソーセージは中々の評判だ。

売り上げは小さくとも、利益は十分に取れた。私の生活は、肉屋に勤めていた頃よりも潤った。妹にも十分な食べ物と、必要な薬を与えることすら出来るようになった。

私は包丁を研ぐ。

路地を巡り、丘を上り。

畑を過ぎて、通りに戻り。

私は包丁を振るう。

担いだ袋の重みに、自然と笑みがこぼれ落ちた。今度のお肉は、昨日のより柔らかいかしら？ 同じ肉は一つとしてない。硬さも、歯ごたえも、味も、香りも。

日増しに血色がよくなっていく妹の顔を見る事が出来るのが、私は嬉しくて仕方がない。

私はふと思いついて、妹に話しかけた。

「明日はアデリにも、お肉を食べさせてあげるからね。いっぱい食べて、元気になるんだよ」

「はい」

妹は柔らかに微笑んだ。

私は肉切り包丁を研ぐ。

## 刃の時間

私がここに売られてきてから、半年が経った。

私は長い事　とはいっても、恐らくは三年かそのくらいの間  
路上で暮らしていた。冷たい石畳の上で、数人の仲間と、たった  
ひとりの妹と一緒に、苦しいながらも生きていた。

けれど、ある寒い晩。妹を埒に残し、一人で食べ物を探しに行つた私は、見知らぬ男に捕まり。そうして何人かの人間を経て、私は結局ここに流れ着いた。

ここは悪くないところだった。屋根があつて、壁があつて、ベッドがあつて。食べ物も三食、欠かさずに貰えた。塩スープとパン。たまに肉や牛乳が与えられることもあつた。友達も出来た。

私はこの半年、何不自由ない生活を送ることが出来た。

それは全て、今日この日のため。

今日、私ははじめて馬車というものに乗った。私が運ばれた先は、大きなお屋敷だった。多分貴族が所有する屋敷だろう。貴族に所有されているという点では、私も変わらないのだが　私はこんなに立派ではなかった。

私は暗い廊下を歩いて、円形の広間に通された。

二階には客席があり、大勢の身なりの良い人間が、談笑したり食事をしたり、思い思いに楽しそうにしていた。私とその広間に入ってきたことに気づいて、幾らかの人間が私に注意を向けたようだったが、私の存在などまるで気にした風のない人間も多かった。要するに、私の生き死になどというのは、その程度の事なのだろう。

今日から私は、剣闘奴隷として戦うことになる。私は子供で女だけれど、私と共に訓練を積んだ仲間には子供ばかりで、女も多かった。

ここで戦わせられるのは子供だけらしい。

さあ、これが初戦だ。この戦いに勝てば、私は晴れて剣闘士の仲間入りを果たすことが出来る。今日の相手は、私とは違う訓練所の人間らしかった。

私にはただひとつだけ、心に決めたことがあった。もしも、もしも生き別れた妹とこの場で相對したのならば。そのときは、私が死ぬのう。

正面、私が入ってきたのと反対側にある扉が開き、対戦者が現れた。その姿を見て、私は幾らか安堵する。対戦者は女の子だった。歳も多分、私と同じくらいだろう。私も自分の訓練所の女のなかでは強い方だけれど、男が相手だと苦戦するかもしれない。

対戦者がこちらに歩み寄ってくるのを見て、私も前に足を踏み出した。広間の中央で距離を置いて、私と対戦者は対峙する。

対戦者の唇が微かに震えるのが見えた。

「……グレッダ」

それは懐かしき友人。大切な友人。あの冷たい冷たい石畳の上で一緒に生きていた仲間。

だけど。

「……だけど、あなたはわたしの妹ではなかったわ」

だからここからは刃の時間。

どうあったところで、あなたとはもう二度と、笑い合う事はない。

さようなら、わたしの友達。

## あなたと私の誕生日

私達の間には鏡がある。

一枚の、ひとつながりの、透明で薄い膜のような、それでも決して壊れる事のない鏡があった。

私はレオノールの髪を梳くのが好きだった。

レオノールは私の髪を梳くのが好きだった。

私達はそうして向かい合わせで、互いの髪を梳くのだ。鏡うつしの自分の髪を梳くのだ。

私達はひとつだった。

昨日までは、間違いなくひとつだったのだ。

私達は先日の午後、森に散策に出かけた。私達は木の匂いが、苔の匂いが好きだった。私達はそれぞれ母さまの手にぶら下がるようにして歩いていた。すると、あるとき鳥が一声大きく啼いた。

レオノールはそれに驚いたのか、気を引かれたのか。声のした方向を見ようとしてよろめき、転んでしまった。私と母さまは急いでレオノールを起こそうとしたのだけれど、レオノールは左目のあたりから血を流して、震えながらうずくまっていた。

それから長い事、私はレオノールに会う事が出来なかった。父さまも母さまも、私がレオノールに会う事を許してくれなかったから

だ。私は、生まれてからただの一日だってレオノールと離れ離れになったことはなかったのに。私は体を引き裂かれたように感じた。

数日、或いは数週間が経って 私はようやくレオノールに会う事が出来た。ベッドの上に横たえられたレオノールは、私が最後に見たときのままの様子で、青い顔をして震えていた。

泣き腫らした目をした母さまが、私に教えてくれた。

レオノールは左目を失ったのだ、と。

それが、昨日の話。

そして今日。ようやく、私はまたレオノールと一緒にベッドで寝る事を許された。

レオノールは、昨日も今日もベッドから出ようとはしなかった。それでも私が部屋に入ってくるのを認めると、レオノールはほんの少しだけ微笑んだ。

ベッドの中。星々の明かりだけを頼りに、私はレオノールの顔を見ていた。レオノールの顔の半分を覆っていた包帯は、今は私の手の中にある。

母さまが私に嘘をつくはずなどないのだけれど、それでもわたしは信じたくなかった。信じたくなかったけれど、それは本当の事だった。

私は食堂から持ってきたスプーンを取り出す。

私とレオノールがデザートを食べる時に使う、おそろいのスプーン。

私はそれを、右の眼に当てた。

……だけれど。

右の眼を剝り抜こうとする私の手を、レオノールは泣きさえして止めた。

悲しいと。何故だかそれは酷く悲しいことなのだと、レオノールは私に訴えた。

私達を分かつのは鏡なのか。そもそも『私達』？ 私達は『わたしたち』ではなく『わたし』であつたはずなのに。

私達は同一のものであつたはずなのに。

私達は鏡を割った。

「男の子ならレオン、女の子ならノエルと名付けようと、そう決めていたのよ」

母さまはよく、そんなことを言っていた。

私はノエル。あなたはレオノール。

それならば私達が鏡映しなのは、恐らくは、私達には計り知れない  
いわば運命のようなものだったのだろう。



私はそつと、レオノールに口づける。

レオノールはそつと、私に口づける。

私達はひとつではなくなってしまったけれど

私はかわりにあなたを、あなたは私を手に入れる事が出来たのだから、これはきつと仕合わせな巡り合わせなのでしょう。

闇に差し込む月の光も柔らかく。

今日は、わたしとあなたの誕生日。

## パン屋の娘は良い娘

広場から少しばかり離れた表通りの一角に、小奇麗な酒場がある。

別段路地裏にあるという事もなく、客層が荒つぱいわけでもないごく普通の酒場。出入りする客も、ごく普通の平民だ。ただ、ここでは他の酒場よりさかんに行われている遊びがある。

それが賭け事。賭けといっても、何もカードの目に金を賭けるだけが可能ではない。

「俺はジョナサンに三枚」

「じゃあ俺は……ヘンリに二……いや四いくか」

「強気だなオイ……当てでもあんのか？」

「あつても言わねえよ」

今回皆さんが賭けの対象にしていらっしゃるのは、これまた良くある浮ついた話で。

この酒場と同じ通りにあるパン屋の娘が、一体誰とくつつくかという　そういう下世話な賭けでありました。

「いらっしやい」

「おう。今日もあれだね、ええ、綺麗だね」

「ご注文は？」

「うん？」

「パンを買うのならお客さん、買わないのならおとといおいでなさい」

「買う買う、買うって……まったく商売上手だね本当に……」

「はいどうも、ありがとう。またのお越しを」

「おいおい、つれないなあ」

「吊ろうにも、あんたのそののつぺりした顔じゃとつかかりがなさすぎて何も吊れないよ」

「……………。まあ…………いいや。な、こんなしけた仕事放ってさ、俺と何処かに行かないか？」

「どこかって、どこに？」

「そうだな、街に繰り出して遊ぶのもいいし、橋を渡って隣町を見に行くのもいいな。何でも、面白い旅芸人が来てるって話だぜ。仮面をかぶったピエロが指揮を取って、大勢の子どもが楽器を鳴らすんだと」

「ふうん」

「なあ、いいだろ？ どこにでも連れてってやるからさあ」

「本当にどこにでも行くの？ 嘔吐かない？」

「もちろん！」

「そ。じゃあ、あんた一人でどこへなりと好きな所に行くといいよ」

とまあ、この調子。パン屋の娘は器量良しだったし愛想もあったのだけれど、始終男に口説かれていればまあ、こんなふうにもなるというもの。娘はいつでもどこでも誰相手でもこの調子だったから、それはまあ、人の恨みも買おうというもので。

ある時この娘三度にわたって振られた男というのがあった。その男は裕福な商人の息子で、まあ言ってしまったらボンボンだ。とにかく、生まれてこのかた挫折というものを知らない。そんな男だったから、振られたということに対して悲しみだとかそういう感情を抱く前に、娘を逆恨みしてしまった。

そこで男は腹いせに、娘が魔女であるなどという事を言いふらしてしまったから さあ、話がややこしくなる。

現代では皆さん、魔女なんて怖くも何ともない上に馴染みもない、良いところで宅急便だのオズの魔法使いを思い浮かべるところでしょうが、この当時はそうはいかなかった。黒々とした森のように、唸りを上げてのたうつ海のように、魔女というのは、それはそれは恐ろしい存在であったのだ。

ここは片田舎の小さな街だ、迷信深い連中も多い というか、そういう人間が大多数なわけで。男の思惑を遥かに越えて、事が大

きくなってしまった。

さて、そこで困ったのが、この街にある小さな教会の牧師さんだ。町の衆は、何も本気で娘の事を魔女だと疑っているわけではなかったのだが、しかし事が事だけに放置も出来ない。まあそういうわけで、牧師さんにお鉢が回ってきたのは当然の流れであった。

「魔女なら浮く。魔女でないなら沈む。……簡単なことだな」

「……」

街の衆が見守る中、手足を拘束されたパン屋の娘が、縄で吊るされて川に沈められた。

そう、彼女は沈んだ。いともたやすく。人間は、基本的には水に浮くように出来ているのだから、これは本来異常なことだ。

とはいえ異常だの超常なんてものには、落ちか種があるのが常であるわけで。この場合もそうだった。娘の手足を戒める枷は鉄製で、もうとにかく重い。けれどそれだけでは目方が足りないということ、娘の体には、目立たない範囲で、鎖でもって鉛の塊だの何だのが括りつけてあった。そんなわけで、娘は当然のように沈んでいく。

街の衆が見守る中、娘は長い事沈んだままだった。何しろ牧師さんが良いと言わないので、街の衆は見ているしかない。

二分が経ち三分が経ち、それでも牧師さんは娘を引き上げようとはしなかった。

これでは娘が死んでしまう　と、街の衆も思わないではなかったのだが、しかし声を上げる者はいなかった。

とはいえこれも、種も仕掛けもないのでは、娘は死んでしまう。ここにもしっかりと、種と仕掛けが用意してあった。

ドン・キホーテよろしく、小道具は革のワイン袋。ここではかの騎士の寓話とは違って、中身は空で、いや空気を入れて使うわけだ。

ま、これで息は大分続く。それでも牧師さんが娘を引き上げた時には、娘はもう限界のようであったが。

娘の疑惑は、これで見事に晴れたわけだ。

だが、これで万事解決　というにはまだ早かった。牧師さんがこんなに長い時間娘を沈めていたのにはわけがあった。こうして娘が水に没している間に、事の発端、例のあの男が『彼女が魔女だ』というのは嘘だった……などとまあ、そのようなことを告白するのを期待していたわけだ。しかし当の男はと言えば、隅の方で青い顔をして震えているばかり。事ここに至り、牧師さんの慈悲も潰えた。牧師さんは街の衆を見渡して、良く通る声で宣言した。

「この娘は魔女ではありません」

街の衆はほっと一息ついて、娘を祝福　というのもおかしいが、娘に声を掛けたり、隣の奴と雑談を始めたりで、ようやく平静を取り戻したようだった。だがそのざわめきを割って、牧師さんはさらに告げる。

「では、彼女のことを魔女だと言った人間は？ 勤勉で貞淑で善良な娘を、魔女であると偽りの告白をした人間は、どうなのでしょうか」

その場の全ての人間の視線が、ボンボンに突き刺さった。

ぼん、と。その男の肩を叩くものがいた。

「……あ」

「良かったわね。次はあなたの番だそうよ」

パン屋の娘が、男に笑いかける。男は引きつった表情のまま、街の衆に担ぎあげられ、川に投げ込まれた。

「おいおい牧師さん、あいつはどうするんだ？ 浮いて来ちゃったようだけど……するってえと、あいつは魔女か？」

牧師は肩をすくめて、一言、

「放っておけばよい」

「え……でもよ、もし本当に魔女だってんなら……」

「何、沈むまで放っておけばいいんだよ。沈んだなら魔女ではない」

「……道理だな」

十方世界に神はおらずとも、世は並べて事も無しという　これ

は、そういうお話でありました。



## 狼と羊のアポリア

「狼が来た」

広場に集まった人々に、青年はそう説明した。

彼はその前日、村の北端　森に面した辺りで起こった家畜の大量死、その唯一の目撃者であった。

「狼が来た」

青年は幾度もそう言った。しかし、その場に集まった人間の誰ひとりとして、彼の言葉を信じる者はなかった。

元々この村の付近には狼が生息していなかったもので、一部の良識ある人々でさえ、彼の言葉はにわかには信じられるものではなかった。そのうえ迷信深い人々の中には、前日の深夜に木々の間を渡る黒い影を見たなどと言い出す者がいて、考えを保留した慎重な人間以外は、みなその話を鵲呑みにした。

『影』についてのまことしやかな噂が、人々の間で囁かれたところ、青年は失意のままにその場を後にした。こういったとき、彼はいつも、そうやって人知れず立ち去った。

青年は朴訥としてはいるものの誠実な人間であつたが、村の多くの人間には、彼のその人柄がいまいち理解されていないこともあつて、それにより彼はしばしば損をした。そういつたことについて、彼にもその自覚はあつたのだが、しかし彼は、それを積極的にどうこうしようとはしなかった。

『正直に生きていれば、人はいつかは分かってくれる』

そんなふうに、彼はある意味楽天的に考えていたのだった。

> p f <

『狼は群れでやってくる。牧羊犬ですら数には勝てない。数は力だ。多数に勝る少数など、まず存在しないと考える』

青年の祖父は、生前彼にそう語ったことがある。青年の祖父は、まだ少年であった頃、一度だけ狼を見たことがあったという。青年は、祖父が遺したその戒めを、決して忘れなかった。

あくる日の早朝、青年は自らの住まいを囲う柵をつくり始めた。彼には守るべき家族、病弱な妻と幼い息子、があり、また守るべき財産、生活の術である羊たち、があつた。自らの身は、自らで守るよりないのだ。

彼が占有する土地は、決して広いと形容されるようなものではなかつたし、彼はそもそもが勤勉な人間であつたから、柵は数日のうちに完成した。

青年は、これでひとまずは自分たちの安全が守られると考え、さやかな満足感を感じながら、その日は眠りについた。

> p f <

ところが翌日の夕方、仕事を終えた青年が家の裏手を歩いていると、彼がつくった柵の、最も森に近い部分、ここはほとんどの場所から死角になっていた、の辺りに、三人ほどの男がいるのを見つけた。

彼らはみな青年とおなじ村の人間で、特に目立って賢いことも無知なことも、粗暴なことも思慮深いこともない、ごくありきたりな者たちだつた。彼らは青年と、彼がつくり上げた柵とを嘲るような様子で、策を蹴ったり揺すったりしていた。

青年はそれを遠目に見てはいたのだが、何も言わなかつた。青年のそう言った態度も、村の人間が彼を低く見る傾向を助長していただろう。

「……」

もう日も暮れる頃だったので、青年は踵を返し、その場を後にした。

その日の深夜、青年は、羊の首につけた鈴が鳴る間隔がいつもより妙に速いことと、そして何より彼らの鳴き声　ほとんど幼子の悲鳴のような　によって目を覚ました。彼はあわてて飛び起きると、家の裏手、家畜小屋に面した窓をうすく開き、その隙間から外の様子を窺った。

月明かりだけが照らす草原に、彼はそれをはっきりと見た。

青白い　彼にはそう見えた　数頭の獣を。数日前に見た、あの獣を。

それは狼の群れに違いなかった。

「　ああ」

青年は絶望の混じった溜息を吐いた。彼には、狼のうちの一头が、その口に子羊のようなものを咥えているのが見えていた。……手遅れだったのだ。彼は両の手で、自らの目を覆った。

> p f <

狼の群れが完全に見えなくなってから、彼は羊たちの受けた被害を調べるために、外に出た。

そこで彼はたと気付く。

彼とその家族が眠りにつくときにはしっかりと掛けられていたはずの、家の扉を守る鍵が、開いていたことに。

青年は半ば混乱しながら、家の中に取って返すが、そこにいるのは妻一人だけ。……彼の彼の幼い息子の姿は、どこにも見当たらなかった。

青年は再び、家の外に飛び出す。

だが、一晩中かけて彼が見つけたのは、柵の一部が無残に破壊されていたことだけだった。

> p f <

数日後。

青年の妻は、もともと病弱だったこともあり、幼いわが子の後を追うように息を引き取った。

それで、彼に残されたものはもう、何一つとしてありはしなかった。

成年は。

青年は、今度ばかりはもう、その場を立ち去ることはできなかった。彼にとって立ち去るということは、ここに、家族のもとに帰ってくるということだったのだから。

彼はただ、立ち竦む。

青年の妻が亡くなった夜、彼の村は跡形もなく焼け落ちた。

その村でただ一人生き残ったのは、あの青年だけだった。領主から派遣されてきた役人に彼が語ったのは、ただひとつ。

『狼が来た』

それだけだった。

## エピクロスの鳥籠

私たちは鳥籠のなかにいる。

お兄様はそう言った。私にはその言葉の意味がよくわからないのだけれど、お兄様が言うのだから、きつとそうなのだろう。

……今は夕暮れ。ここには黄昏と夜しかないのだとお兄様は言う。私も、そうだと思う。

ここにはたくさんの素晴らしいものがあるのだけれど、ないものもある。ここには……いや、もつどこにも存在しない、数々のもの。森。山。川。丘。朝。昼。虹。風。お日さま。星。月。そして空。

私は顔を上げた。

壮麗な細工の施された銀のランプ　そのやさしい光の向こうに、お兄様のお顔が見えた。

私はそつと、室内を見回した。

壁を彩る、異国風のタピストリ。大きな石造りの暖炉。床に広がる、真紅のペルシア絨毯。こまやかな細工が目を引く、銀のランプと銀の燭台。木目が美しい鏡台の上には宝石箱があつて、その中で、色とりどりの宝石が輝きを放っている。

そして、私の正面には、お兄様が。

何より大切な、私のお兄様。

「……ん」

私の視線に気付いて、お兄様がお顔を上げた。そして、口を開く。「眠いのかい、トリシア？そろそろ寝ようか」  
優しい、大好きな声。

私はべつに眠かったわけではないのだけれど、それでも全然眠くないということもなかったので、

「はい」

と、素直に頷いた。

> p f <

「さ、今日はどんなお話が聞きたい？」

私を美しい天蓋のあるベッドに寝かせると、お兄様はそう尋ねた。お兄様の大きな手が、私の頭をやさしく撫でた。

私が眠りにつく前に、お兄様は必ずお話をしてくれる。どれひとつとして同じものがない、宝石のような、素敵なお話。そのお話の中では、私ははるか東方にある異国のお姫様になり、あるときははるか昔の大王になり、またあるときは、砂漠に行く一頭のラクダになった。

私は、お兄様のお話を聞くのが、他の何より　お兄様自身をのぞいて　何より好きだった。

「東の果てにある国の王様のお話、その続きが聞きたいです」

お兄様がしてくれるお話は、不思議と驚きに満ちていて、それは尽きることがない。私はいつも胸を高鳴らせながら、お兄様のお話に聞き入るのだ。

「ああ……そうだったね。そのお話はまだ途中だったね。それじゃあ今日は、その続きを話してあげようね。遙か西の果て、海を隔てた島国にいた、偉大な王様のお話だ　」

お兄様は滔々と語り始める。

平穏な一日は、こうして終わる。

お兄様の声を聞きながら、私は目を閉じた。まぶたの裏には、世界が広がっていた。

> p f <

僕たちは鳥籠の中にいる。

そう言ったら、妹は少し不思議そうな顔をして、可愛らしく首をかしげたのを覚えている。

「さ、今日どんなお話が聞きたい？」

妹の頭を撫でながら、僕は尋ねる。

「東の果てにある国の王様のお話、その続きが聞きたいです」

澄んだ、やさしい声が返ってくる。僕はそれで思い出し、

「ああ、そうだったね。そのお話はまだ途中だった。それじゃあ今日は、その続きを話してあげようね。遙か西の果て、海を隔てた島国にいた、偉大な王様のお話だ」

なるべくゆつくりとした調子を心がけながら、話し始めた。

妹は、僕の話に、目を輝かせて聞き入ってくれる。ときどきその愛らしい瞳を閉じて、物語の世界に心を遣り、そしてまたそのつづらな瞳を開いて、話の続きをせがむのだ。それはとても言葉にできないくらいに嬉しいことなのだけれど、トリシアは僕のお話が終わらない限り眠ってくれない。それがほんの少し困ったところだった。

……とはいえ、僕にしたってトリシアにお話をするのは嫌いではない。それどころか、僕はトリシアにお話をするのが何より彼女自身をのぞいて 何より好きだった。彼

> p f <

僕はお話を続ける。僕がするお話は、そのほとんどが僕の創作だった。聞き知ったお話、本で読んだ物語などは、とうの昔に語り尽くしてしまった。しかし不思議なもので、こうしてトリシアの傍らに座っている限りにおいて、僕の想像力は尽きる素振りを見せない。いまや、僕の想像の腕はミダス王のそれに等しい。僕の想像の指先が触れるものはすべて、黄金に変わるのだった。

「そこで王様は、空を見上げて」

「お兄様」

「ん。何だい、トリシア」

トリシアは大抵、黙って僕のお話に聞き入っている。けれどたま

に、僕に物を問うことがあった。

今回も、多分。

「空とは、いったいどのようなものなのでしょうか？」  
空。

「……ああ、空は、ね……もうずっと昔、ずっと昔にあったものなんだ。気が遠くなるくらい、昔にね。今はもう、どこにも、ないんだよ。だから僕にも、それがどういうものなのかわからないんだ」「そうなのですか」

「うん。……ただ、見上げるというのだから、きっと上のほうにあったのだろっね。僕らの頭上、遙か　どこかに」

「……」

トリシアは納得したように見えた。そう見えはしたが……本当のところはわからない。彼女は本当にやさしく、賢い子だから……その質問が僕を困らせるものと分かって、そう振舞ったのかもしれない。なかった。

空。

空なんてもう、どこにもない。そう、どこにもない。

ここにあるのは、針を差し込む隙間もない石造りの壁と、床、天井だけ。壁に引っかかった何かの布きれ、大げさなつくりの通風口、麻でできた敷物に、何でできているのかよくわからない、煤けたランプ。腐りかけた粗末なベッドの隣には小さな台があって、その上にはいくつかの石ころが転がっていた。

大切なものはひとつだけ。

トリシア。

僕の最愛の、最後の肉親。

> p f <

窓の一つもない、出入り口のない空間に、僕たちは閉じ込められている。



僕たちは、囚われの身だった。

王位をめぐる争いから、僕の父と母は殺された。父と母を殺した連中が、なぜぼくたちを殺さなかったのか。そして、殺さないのか。それは分からない。……僕が知る由もないことだ。

そうして僕たちは、この石造りの、日の差さぬ地下牢に幽閉されたのだ。

ここには真実何もない。僕と、僕の妹　トリシア以外、何もない。

「お兄様。それから王様はどうなさったのですか？」

つい黙り込んでしまった僕を、トリシアがそつと促した。

「……うん。王様はね　」

トリシア。

可愛いトリシア。

僕は、トリシアに嘘をついた。

妹は本当に幼いころにここに入れられたので、外の世界をよく知らないのだ。

ここには何もありませんのに。壁を彩るタピストリも。大きな石造りの暖炉も。床に広がるペルシア絨毯も。銀のランプと銀の燭台も。鏡台も宝石箱も、その中にあるはずの、色とりどりの宝石も。全てが、何もかもが嘘だった。

> p f <

何故そんなことをしたのか、今となっては思い出せないが……はじめの頃は、妹に嘘をつくことが、妹を騙すことがひどく心苦しかった記憶がある。しかしいつからか、その痛みは薄れていった。それは多分、僕が自分を騙す術を身につけたからだろう。自分が妹に押し付けた幻想を、自分自身で受け入れる。そうしてさえしまえば、この生活も、そう悪いものでもなかった。

妹　トリシアと言えば、結局のところ、本当のことを薄々感

じ取ってはいるのかもしれない。その上で、僕の嘘に付き合ってくれているのではないか　最近、そんな風に思う。

僕が嘘を吐きはじめてのは、多分子供っぽい同情心からだっただと思う。僕が妹を守ってやらねばならない、救ってやらなければならぬという、そんな思いはあったように思う。だが今こうしてみると、果たしてそれは本当なのだろうかという疑念を振り払うことができない。

守られているのは、果たしてどちらなのか。救われているのは、果たしてどちらなのだろうか？

> p f <

「王様は、空を見上げてこう言った。『これが全てだ。これが私の持ちつる全て、私が愛するものの全てだ』」

この生活がいつまで続くのか、それは分からない。何しろそれは、外の、僕たちの与り知らぬ世界で決定されることなのだから。僕たちは明日、毒を盛られて死ぬことがあっても、何ら不思議ではない。同様に、あと何十年このままの生活が続いても、その末に老いて死んだとしても、何もおかしくはない。そして、外に……この石造りの牢獄の外の世界を、再び見ることも　まずありえないとは分かっているけれど　もしかしたら、あるかもしれない。

ああ。

もう一度、外の世界に出ることができたら。あの光に満ちた世界に、再び帰ることができたなら。それはほとんど夢のような話ではあるのだが、ここでは夢を見る以外にすることなどないのだ。

しかし、その想像だけは、僕の心を満たしてはくれない。僕は恐ろしい。

もしその時がきたとして、もし外に出ることができたとして、妹は、トリシアは、僕を恨むだろうか？ 憎みはしないだろうか？ 僕はただ、それが恐ろしいのだ。

「お兄様？」

再び言葉に詰まった僕を、トリシアは不思議そうに見上げ、そして微笑んだ。

ああ、だから。

だから、願わくは。

もしその時が訪れたなら、

「お兄様」

その笑顔が、

「トリシアは仕合わせです」

僕から、勇気を奪うことがありますように。

トリシアの手を握って、僕はお話を続ける。

## ただひとりのための英雄

広場の中央に、民衆を威嚇するようにそびえる漆黒のギロチン台。夕日が空に溶け始める頃、ひとりの少女がその階段を上る。木の板でできた手枷を嵌められ、繋がれた鎖を引かれながら。

彼女は魔女の容疑をかけられて、その道を歩く。それは逃れられない罪。すべてを諦めたかのように、少女は虚ろな瞳でギロチン台を見つめた。刃は、鈍色に輝いていた。

男は短剣に手をかけた。眼前に広がるは人の群れ。娯楽の少ないこの街での、数少ない観劇。それがこのギロチンによる処刑である。遠く離れた街からもこの処刑を見るために人が訪れてくる。広場は、そうした野次馬たちで溢れ、男の行く手を阻む。

ただひとりのための英雄になりたい。たとえ穢れきったこの手だとしても。罪に溺れた魂だったとしても。

そして男は短剣を抜く。その道を阻むは幾十の民衆と幾十の兵士。これは、戦争。

ここは、戦場。

男は静かに歩き出す。短剣をその手に。少女の待つ、ギロチン台へと。

少女は街の片隅で、花売りをしていた。疫病が流行る中、幸運にも少女は未だ健康で、貧しくはあったが平穏な毎日を過ごしていた。そんなある日、少女は路地裏で、ゴミにまぎれて倒れる血塗れの男を見つける。どうせ盗賊の類だろう、と一瞥して、再び帰路につく。それでも聞こえる男の呻き声。少女は立ち止まり、男へと振り返るのだった。

男が目覚めると、そこは見知らぬ屋根の下だった。体に重みを感じる、首を動かすのも辛いので、眼球の動きのみで見渡すと、どうやらここは民家のようなだった。

ギシギシと呻く体を、薄い毛布ごと起き上がらせる。貧相な部屋だった。木製のテーブルに二組の椅子。暖炉すら見当たらない。逃げべきだ、と言う本能に従って、男はすぐ脇の窓に手をかけた。しかし、腕に力が入らず開ける事が出来ない。

そうしているうちに、少女が部屋に入ってきた。赤子も入りそうな大きな力ゴに、色とりどりの花。どうやら花を摘んできた帰りらしい。

「あら、生きてたのね」

そう笑って、水とパンを差し出してくる少女。

その優しさに、男は生まれてはじめて、涙を流した。

## 魔女狩り

その日、僕が見上げた空は青かった。

「先生……」

そよ風が頬を撫でる。

どうやら、雨が降ってきたようだった。

それは半年ほど前のことだっただろうか。旅人というにはあまりにも貧相な装備で、先生は村にやってきた。

行き倒れに近い状態で倒れていた先生の面倒をみたのが僕の両親だった。

僕は先生からいろいろなことを教わった。先生は遠い都の生まれらしく、僕の知らないことをたくさん知っていた。

いつしか先生の授業は、僕だけのものではなくなっていた。村の子供たちが集まり、小さな塾のようになっていた。僕らは誰もが先生を慕った。村人の誰もが先生を頼った。先生が教えてくれた方法で、村の収穫は増えた。先生が村に訪れる商人と掛け合ってくれたお陰で、村の収益が増えた。先生が来てから、村はどんどん豊かになっていった。

僕たちにとって先生は、なんでもできる魔法使いだったのだ。

とても平和で、輝いていた日々だった。そんな日々に関わりをもたらししたのは、ある日突然やってきた異端審問官だった。

となり村から、先生を魔女だという告発があったらしい。

そうして先生は大勢の兵士に囲まれて、どこかへ連れて行かれてしまった。

先生は、大丈夫、すぐに戻ってくる、と笑っていた。

それから程なくして、先生が魔女として処刑されたと、商人たち

の噂で聞いた。僕らの魔法使いは、魔女と呼ばれて死んだのだ。

その日、僕が見上げた空は青かった。

「先生……」

そよ風が頬を撫でる。

先生は、本当に魔女だったんですか？

僕には本当のことは何もわからない。ただ、頬を流れる涙は止まることはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0486m/>

---

死者物語

2010年10月10日04時13分発行